

沼野治郎

Namano Jiro

第三の視点をさぐる

モルモン教を
どう見るか



MORMON

ききくら出版

モルモン教をどう見るか

第三の視点をさぐる



沼野治郎

Numano Jiro



せせらぎ出版

序 文

江戸川大学名誉教授 高山 眞知子

本書の出版される頃にはアメリカの次期新大統領はロムニーかオバマに決まっている。もしロムニーになれば、アメリカ史上初めての「モルモン教徒」の大統領である。落選しても、ロムニーはやがて「モルモン教会」の総主教にあたる大管長ぐらいになるであろうし、また次期大統領選には、やはり「モルモン教徒」のハンツマンが今回以上に大活躍するであろう。

この耳慣れない「モルモン教」は、アメリカ生まれの新宗教で、日本で天理教が生まれた頃に生まれた。天理教のように迫害されたが永く生き延びた。天理教が、日本の神道仏教文化の中から、靈感によって古代史の舞台の下真ん中（明日香）で生まれ啓典を残したように、「モルモン教」はキリスト教文化の中から、靈感によって独立間もないアメリカ東部で生まれ、啓典を残した。

創始者のジョーゼフ・スミスは38歳の若さで殺害されたが、死の直前、実はアメリカ大統領選に出馬して、ずいぶんと「突飛」な綱領を掲げていた。「奴隷を所有者から国家が買い上げ、奴隷制を廃止する。資金には、公有地の売却と議員給与の削減分を当てる」などで、南北戦争の15年も前のことである。

スミスの後継者ブリガム・ヤングは、先年の冬季オリンピック開催地ユタ州ソルトレークシティ一帯の開拓者でもあるが、ヤングは何と伊藤博文など岩倉米欧使節団の来訪を受けていた。明治4年（1872年）のことである。岩倉一行がワシントンに向かう途中、開通したばかりの大陸横断鉄道が大雪で動けず、二週間もロッキー山中に閉じ込められてしまったのである。伊藤博文は「モルモン教」に詳しくあった。森有礼等とともに、なんとか日本のキリシタン解禁に努力するとともに、アメリカでの「モルモン教」迫害への観察から、アメリカ憲法の謳う「信教の自

由]・「政教分離」の立て前の限界も、しっかり見抜いていた。そして欽定明治憲法を制定したのだ。

この頃ロムニーの先祖(曾祖父)は、ユタに住み、「モルモン教会」の有力者の一人であったが、教義上の一夫多妻を実践していたため、迫害・投獄の恐れがあり、それを逃れてメキシコに亡命することになった。そしてその息子は、メキシコから1912年の革命を逃れて今度はアメリカへ再移住する。約100年前のことであった。

ということは、当時、反政府的異分子と見られていたロムニー一家の子孫が、今や伊藤博文並みに政府の「親分」になろうとしている、ということである。この百年で、アメリカに、そしてアメリカのキリスト教に、一体何が起こったのだろうか。これが根本的な問いだ。「今なぜモルモン教か」である。

「モルモン教」について日本語で書かれた書物は少ない。あっても、布教目的か、反感に満ちた不公平なものが多い。アメリカでは、「モルモン教」は創始から約180年を経て、今や信徒として第五～第六世代目を迎える家族もいて、生活も安定し、彼らの中からも元信徒の中からも、学術的に優れた研究者・歴史家が多く育っている。古文書的な資料はよく保存されている。「モルモン教」ではなんと、先祖の系図調べとその死せる先祖への「代理洗礼」とが、信仰実践の一部なのである。(ユダヤ人やヒットラーにまで「代理洗礼」を行おうとするボランティアがいて、教会側は慌てているようであるが。)日本の戦中派が、自分たちを裏切ったと思われる天皇制の背景としての古代史に興味があるように、アメリカでも「モルモン教神話」の背景に対する知的関心は高い。さまざまな研究手法で(コンピューターによる聖典言語の解析も含め)分析されている。また、ロムニーの登場を契機に、「政治権力とモルモン教」、「大統領を目指したモルモン教徒たち」等のテーマの研究も盛んである。そしてもちろん、外部からの揚げ足取りの書物・映画・テレビ、そしてネット交信も花盛りである。

さて、日本人・沼野治郎氏による本書『モルモン教をどう見るか』は、以上の観点からも、まことに待望された書物である。氏は、1958年に16歳で関西で「モルモン教」に入信・受洗されたとのことであるが、真摯な信徒であり続けるとともに、ブリガムヤング大学を卒業後、日本で大学の先生として「モルモン教」関係史を、学術的に極めて深く研究しておられ、かつ、日本の「モルモン教徒」の実情にも通じておられる。本書は、氏のライフワークとも呼べる力作である。「モルモン教」のさまざまな側面について多様な論文を読み解き、公平に解説しておられる。ご自分の論文も紹介しておられる。

もし読者の中に、伝道者からではなく研究者から「モルモン教」について公平に詳しく聞きたいという方がおられた場合、本書は絶好の書である。大学の教養課程の「アメリカの文化・宗教・社会・政治」などの分野の授業で、教科書の一環として使用したり、卒業論文用に参照したりすることのできる、信頼のおける書籍である。

ところで、斯く記す私自身の紹介も多少必要であろう。日本で何らかの辞典に「モルモン教徒」という項目のある場合、私は幾度かその項目を担当執筆してきた。「アメリカ史の謎」、「ブリガム・ヤング」など「モルモン」研究の小論文もある。日本の大学（東京大学、著者註）のアメリカ学科を卒業して、アメリカの大学でモルモン研究の博士論文も書いた。また、たまたまアメリカでモルモン教史に深く関連する土地（ニューヨーク州、イリノイ州、ユタ州、テキサス州など）に計20年ほど在住した。もちろんソルトレークでスキーも楽しんだ。夫がブリガムヤング大学経済学部の客員教授を一学期間勤めたこともあるが、パーティでは好きなビールやコーヒーは出てこなかった……。

私は、反安保闘争の終わった1960年代に学生時代を過ごし、アメリカの対抗文化（サイケデリックな「LSD」に代表される）と「LDS」（Latter-day Saints, 末日聖徒。つまり「モルモン教徒」の正式名称）の双方に関心を持った。もし今日、「LSD」の子供を「アップル」の天才ス

ティーン・ジョブス氏と見做すならば、「LDS」の子供がロムニー氏だろう（ロムニー氏は60年代初期、カリフォルニアの対抗文化の中心バークレー大学ではなく、スタンフォード大学にいた）。

私の気に懸かる社会学者ロシア人のピティリム・ソローキンは、大著『社会的文化的動態』（1939年-41年）で、三つの型の文化（理想主義型・快楽感覚型・中間型 - Idealistic, Sensate, Ideational）が循環することを述べているが、この著の執筆に際し、ソルトレークシティを訪れている。つまり、ソローキンにとって、20年代（いわゆる「ローリング・トゥエンティズ」）のアメリカは「快楽文化」、聖なるモルモン教の文化は「理想主義文化」の型として見えていたのであろうか。

アメリカではたとえば、中絶問題を巡って「プロ・チョイス（中絶賛成派）」と「プロ・ライフ（反対派）」が対立拮抗しているが、これは性規範としては曰ば「快楽文化」と「理想主義文化」の対立と見ることもできよう。ロムニー氏の出自は後者だが、マサチューセッツ州ボストンでCEOや州知事の時代に、「快楽文化」の知的な信奉者たちをたくさん目撃し、票田としても気にしていたに違いない。大統領候補者としてのロムニー氏は「社会的文化争点」（中絶・同性愛・マリファナ合法化、銃規制などのいわゆる「ソーシャル・イシュー」）で、「態度がコロコロ変わる」と言われているのは、この二つの異質な「文化の型」への理解力が広く深いゆえではなかろうか？ アメリカは、聖なる「LDS」のユタ州と快楽的「LSD」的ラス・ヴェガスのあるネヴァダ州が、隣接同居している国なのである。

この二つの文化的価値観の間で揺れるアメリカの「心性」への理解こそ、かつての伊藤博文のように、日本によるアメリカへの対処の仕方の判断に役立つのではないかと思われる。そしてその点でこそ、この文化の一方の代表とも言える「モルモン教」を詳しく分析した本書が、必読書であると言えるゆえんなのである。

P.S.,

ここまで書いたところ（2012年9月28日）で、アメリカの代表的週刊誌「タイム」の最新号に、「モルモン教文化のロムニー」という特集記事が掲載された。日本語版はない。なおのこと、沼野氏の本書を通してこの問題を追及していただきたいと考える。

はじめに

19世紀以降、プロテスタント諸派のキリスト教会が次々日本に布教を開始して以来、200年が経過しようとしている。しかし、日本人にとってキリスト教は外国の宗教という印象をまぬがれず、少なからず違和感をもって見られている。社会の中でなじみのない、異質的な少数派に留まっている。ましてその中でも異端視されているさらに少数派のモルモン教会（正式名称は末日聖徒イエス・キリスト教会、以下モルモン教会）は、あまり正確には知られていない。好奇の目で見られたり、時に得体のしれない宗教団体と受けとめられたりすることさえある状態である。

ずっと昔、大学入試問題にモルモン宗とソルトレークシティを結び付ける質問が出たことがあった。モルモンタバナクル合唱団がNHKで放送されたり、合唱団のアルバムが有名なレコード会社で頒布されたりもした。日本人は遠くにある時は、関心や興味を持って比較的好意的に知りとうとするが、上陸し身近に存在するようになると距離を置き、なかなか受容される状態に達しない。日本に移り住む外国人が遭遇する状況に似ている。

モルモン教会は日本でもキリスト教界において異端視され、アメリカのキリスト教系新興の宗教と受けとめられている以外、よく理解されていない。

私は戦後間もない1958年にモルモン教会の伝道が再開されて暫くの頃、関西でこの宗教に加入した。16歳の高校1年生の時であった。その後教会を離れることなく、社会が変遷し、教会もある程度発展して現在に到るのを観察してきた。自身の信仰も教会理解も、ブリガムヤング大学留学（1974-1976年）の頃から変わっていった。帰国後英語を教える教職に就いたが、かたわら聖書学や批判神学を学んで、モルモニズムの観察者・研究者として今日に到っている（専門は英語学、言語学）。そこで本書を書く目的は、末日聖徒イエス・キリスト教会、いわゆるモルモン

教会の理解が深まるよう資料を提供することである。それは、一つの宗教として教会自身が主張している教義体系などを紹介し、次にそれができるだけ中立的に、また批判的に分析・説明を試みることである。大学における宗教学のクラスで講じられる内容やレベルを頭において筆を進めたいと考えている。そこで、本書の題にあるように「モルモン教をどう見るか」という視点を軸に、護教的でも反モルモンのでもない、学問的研究の裏り豊かな現状の紹介を心がけて取り組んだ。

内容としては、Ⅰ部でモルモン教会の興った時代背景、モルモン書についてなど、教会初期のアメリカにおける状況を扱い、Ⅱ部で他のキリスト教会と異なる点、モルモン教会の特徴などに触れる。そしてⅢ部で日本への伝道、日本のモルモン教会の歴史、教徒の日常生活などを紹介する。

なお、英語圏では20世紀末以降モルモニズムについて研究者の関心が高く、数多くの論文や書籍が発表されている。オックスフォード大学出版を始め、イリノイ大学、イエール大学などアメリカ諸大学の出版部がモルモン教関連の書籍を刊行していて、日本でも洋書出版案内で毎月数点目にするほどである。これは1950年代以降「新しいモルモン歴史観」が登場したのに次いで、70年代にレナード・アリントンが教会歴史家の職に就いて教会文書庫の開放に尽くしたこと、さらに21世紀に入って教会初期の膨大な一次資料が入手可能になったことが背景にある¹⁾。そこで、新しい知見に基づいて研究者や関心ある教徒が今日理解しているモルモン教の姿を、本書に解説していきたいと思っている。

著 者

目 次

序 文	iii
はじめに	viii
● 第 I 部 末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）の登場	
第 1 章 モルモン教の登場した時代背景	5
第 2 章 ジョセフ・スミスの少年時代	7
第 3 章 神の顕現とそれに続く示現	10
第 4 章 モルモン書	12
1 モルモン書の翻訳	12
2 モルモン書のあらすじ	13
3 モルモン書の評価・分析	14
4 モルモン書をどう見るか、結語	25
第 5 章 教会の創設	27
第 6 章 教会初期から現代に到る歴史	28
1 ニューヨーク州フェイエット	28
2 オハイオ州カートランド	29
3 ミズーリ州ジャクソン郡インディペンデンス	33
4 イリノイ州ノーブー	37
5 ユタ州ソルトレークシティ	40
● 第 II 部 モルモン教はキリスト教であるのか？	
第 7 章 キリスト教であるのか。カルト視される理由	51
第 8 章 モルモン教会の特徴	56
1 三つの類型とモルモン教	56
2 スタークによるモルモン教会の特徴	59
3 典型的なモルモン教徒の人物像	64
4 外部の評価—インターネットの書き込みから	66
5 聖書から生起・発展した教義上の特徴	68

第9章	神殿の儀式「エンダウメント」	74
第10章	一夫多妻制度の発生と終了	79
	1 ジョセフ・スミスの多妻	79
	2 ジョセフ・スミスが一夫多妻を始めた理由	80
	3 1890年の公式宣言とその後	83
	4 末日聖徒は一夫多妻を克服できるか ——ユージン・イングランドの提言	85
第11章	黒人に神権が拒まれていたこと	88
第12章	マウンテン・メドーズの虐殺	92
第13章	教会の資金力に対する疑問	95
第14章	モルモン教会が現在直面する問題	97
● 第Ⅲ部 日本におけるモルモン教会		
第15章	日本への布教	109
第16章	日本におけるモルモン教の歴史	112
	1 1901～1924 明治・大正期 [不首尾な結果]	112
	2 1925～1947 戦争をはさむ昭和初期 [伝道部閉鎖]	114
	3 1948～1967 昭和中期 [伝道部再開・成長期]	115
	4 1968～1980 昭和中期 [発展期]	117
	5 1981～今日 昭和後期・平成時代 [安定・成熟期]	119
第17章	日常の礼拝様式と信仰生活	124
	1 礼拝	124
	2 信仰生活	125
第18章	日本のモルモン教会の特徴	128
第19章	日本のモルモン教会が現在直面する問題	132
	おわりに	135
	註	139
	補足資料	158
	参考文献	161
	索引	167

モルモン教をどう見るか
— 第三の視点をさぐる —

第 I 部

末日聖徒イエス・キリスト教会 (モルモン教) の登場

第1章 モルモン教の登場した時代背景

創設者ジョセフ・スミスの誕生が1805年で教会設立が1830年であるから、18世紀末から19世紀初頭のアメリカの状況を概観しておくとう理解の助けになる。

ジョセフ・スミス（正確にはジョセフ・スミス・ジュニアであるが以下スミス）が生まれたのは、アメリカ東部13州が独立を宣言してから29年しかたっておらず、西部の辺境はすぐ隣合わせの時代であった。独立戦争が終結したのはその6年後、次いで1787年に憲法が制定され初代大統領ワシントンが1789年に就任していた。スミスが誕生した時、大統領は三代目のジェファソンであった。そして3年後にアブラハム・リンカーンが生まれている。

ちょうどスミスの時代と重なって当時のアメリカには第二次大覚醒の運動（1790年代～1830年代）が起こっていた。それは第一次大覚醒（1730年代～1740年代）運動と同様、キリスト教の復興運動であって保守主義に向かう潮流でもあった。独立宣言署名後50年たった1823年、著名な建国の創始者（米国憲法制定者）ジョン・アダムズ（二代目大統領）とトマス・ジェファソン（三代目大統領）のふたりがあいついで死去して国民の指導者が去り、多くの人々は第二次覚醒運動に生き方の拠り所を求めるようになっていた。キャンプミーティングで知られるこの運動は、伝道精神に燃え情熱的で、その結果人々を宗派別に対立させ自分に同意しない者を遠ざけさせた。覚醒運動が起こったのは憲法で政教分離が確立されたことも一部背景にあった。宗教が統治者の支配の手を離れ、宗教者自身の手にとされたので信仰復興（リバイバル）が興ったのである。

独立戦争が始まった1775年頃、最大の宗派は会衆派（ピューリタン教

会の末裔）と英国教会、そしてクエーカーであった。それが1800年頃には福音主義のメソジスト派とバプテスト派が最も数を伸ばしていた。第二次覚醒運動に共通した考え方には、独立戦争の理想であった平等主義の追求があり、伝道精神旺盛な諸教会も平会員を優先する人民主義（あるいは大衆主義、ポピュリスト）の傾向があった。伝統的な教会で聖職者が大学で訓練を受けていることが要求されたのに対し、救いには個人の信仰の方が重要視された。従来多くの初期のアメリカの教会ではカルヴァン派の伝統を引き継いで、人は罪深く邪悪で神の恵みによりようやく救われると信じていたが、新しい再生運動においては人が状況を改善できる能力を有していると強調した。人は救われるに際し自分の自由意思を行使でき、救いは万人に開かれているとし、人の置かれた状況について楽観的な見方を持っていた。このようにこの運動はその後アメリカにおけるキリスト教の趨勢に大きな影響を及ぼしたのであった。

この時期に表れた主要なキリスト教会をあげると、デイサイプル教会、キリストの教会（Church of Christ）、後にセブンスデー・アドベンティストとなるミラー派（1840年代）、メソジストから出たホーリネス運動の萌芽（フエーベ・パルマーの活動）、それに末日聖徒の運動がある。クリスチャンサイエンスは少し遅れて第三次覚醒運動（1850年代-20世紀）の1860年代に、そしてものみの塔運動は福千年・回復運動の流れを汲む宗派として1870年代に始まっている。

経済的に見れば、1783年独立戦争に勝利した後、アメリカは経済的自立をはかる段階にあった。おりしも1760年代に英国で始まった産業革命は1820～30年代にアメリカにも波及するが、一般的にはまだ農業中心であった。辺境地帯で丸太小屋に住むリンカーン、トム・ソーヤ、「大草原の小さな家」（ローラ・インガルス・ワイルダー作）のイメージが代表する。

モルモン教登場の時代背景を俯瞰して言えば、ピューリタニズムの伝統と民主主義を受け継ぎながら、アメリカ全体が未開の西部へ向かって西漸運動を続ける時代であった。

第2章 ジョセフ・スミスの少年時代

祖先はニューイングランドに住む普通の農民であった。父方は17世紀に英国からマサチューセッツ州に移住し、後にバーモント州に転居した。母方はスコットランドからの移民でコネチカット州に定住した。そして父ジョセフ・スミス（ジョセフ・スミスと同名。Sr. をつけて区別するがここでは以降「父スミス」とする）と母ルーシー・マックは、1796年バーモント州タンブリッジで結婚する。スミスは朝鮮ニンジンを扱う商売に失敗し、多額の負債をかかえ資産を売り払ってしまった。以後30年にわたり家族は貧困の淵をさ迷うことになった。困窮状態は頻繁に引っ越すことを意味した。その後14年間に7度引っ越している。家族の中で母ルーシーは宗教的で保守的であり、父スミスは仕事の面で失敗もあり性格的に弱さが見受けられた。三男として生まれたジョセフ・スミスは、兄アルビンが1823年死んだ後、一家の中で頼られる存在となっていた。しかし、教育面では家族の経済状況から正式な教育はわずかしか受けていない。ただ、彼の聖書の知識と聖書に影響された文体を見ると、彼が幼少期に受けた教育のかなりの部分が聖書に由来していると考えられる¹⁾。

ジョセフ・スミスは若い頃、地下に隠された財宝を探し出す錢掘り師とでも訳すべきことに従事したことがあった。それは1819年から1826年の期間にわたっていた。1820年代初めに彼が二つの石を手に入れ、それを使って遺失物や隠された物を捜す能力があるという噂が近隣に広まっていた。そして1825年、ジョサイヤ・ストールに父とともに雇われ、ペンシルバニア州ハーモニーで地下に隠されたスペイン鉱山址の金塊を掘り当てるチームに加わった。しかし、成功しなかった。そのことで1826

年3月ストールの甥に契約不履行で訴えられ、サウス・ベインブリッジの法廷に出廷している。（31ページ地図参照）

この時期のことについて、ジョセフ・スミスは1839年に記した自伝で間接的に次のように書いている。「わたしはいろいろな人々と交わって、しばしば多くの愚かな過りを犯し、若者としての弱さと人間性の至らなさを示した。遺憾ながら、このために神の目にかなわないさまざまな誘惑に誘い込まれた²⁾。」彼は1823年以降徐々に宝探しから身を引き、後述する発見した金属版の翻訳に目を向け始めていた。換言すれば、彼は宝探しの誘惑と物欲を克服するのに4年かかったと言えるかもしれない³⁾。

このことについて付言すると、19世紀前半ニューヨーク州の民衆が宝探しなどの魔術を利用していただけがわかっている。ジョセフ・スミスの農場や近隣で金品を掘り当てることが行われていた。これはジョセフ・スミスに対する裁判の反証として宣誓供述書が何人もの人物から取られたことから、逆にジョセフ・スミス以外に何人も供述人自身が宝探しに携わっていたことがわかったのであった⁴⁾。

当時、キリスト教徒は天使や悪魔の存在、守護霊の存在を信じるのと混ざり合うようにして魔術の力、言いかえると見えない力の存在を信じていた。たとえば、特別なろうそくや水、鐘を使って罪を除くとか、妊娠・安産を求めて呪文を唱えるなどであった。特に一般民衆にそのような傾向があった。スミスの家族でも宗教と魔術が溶け合う状態で共存していた。初期のモルモンイズムと魔術について書いたD.マイケル・クインは、18世紀末から19世紀初め頃までキリスト教と魔術が共存するような形であったのが、それ以降魔術に類する活動が駆逐され姿を消していったことを検証している⁵⁾。

ジョセフ・スミスについて語り継がれた逸話がある。それは1812-13年にコネチカット州を襲ったチフスにかかり、左足を切断すると言われたが、それを断って手術に耐えた時の話である。麻酔の目的でワインかブランディを勧められたが断り、縄でベッドに縛ることも断ったとい

う。長時間にわたる数度の手術にようやく耐えたが、生涯かすかに歩行障害を残すことになった。そして、その時の激しい痛みと恐怖がトラウマとなって残ったと考えられる⁶⁾。

第3章 神の顕現とそれに続く示現

1820年春ジョセフ・スミスは、ニューヨーク州パルマイラで現在「最初の示現」として知られている神の顕現（theophany）を受けた。これは末日聖徒にとって福音の回復の始まりであり、神の摂理による新しい時代（dispensation. 教会の呼び方では「神権時代」）の開始を告げる重要な出来事であった。スミスは1838年に回想的にこの召命の次第を記録している¹⁾。これが教会の公式版として受け継がれ今日に到っている。スミスはどの教会に加わるべきか分からず、新約聖書ヤコブ書1章5節の「知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい」という教えに従って、静かな森に入って祈った。そして神とキリストの訪れを受け、どの教派にも加わらないように指示されたと伝えている。

実際にはこの「最初の示現」は、1832年、1835年、1838年、1842年版があり、顕われた神格者の数が初めは「主」一人であったのが増えたり、語られた内容が「個人的な罪の赦し」の宣言であったのが、「諸教会の背教」「どの宗派にも加わらないよう」と変わったりしていた。今日の批判者はこの点を指摘して、首尾一貫しておらず矛盾していると非難し、信じるに足りないとする。それに対し、第15代大管長ゴードン・B・ヒンクレーは四福音書の間にも異同があっても、クリスチャンの信仰に問題が生じないのと同じで問題にならないと述べた。リチャード・L・ブッシュマンは、ジョセフ・スミスが教会を組織・指導するうちに自信を深めて詳細な記述が伴うようになったと見ている。見神録が生成発展の道をたどったと言うのである。また、最近スティーブン・C・テイソムは異なる版が存在することについて、否定的・批判的にと

らえるのではなく、「現象学的留保 (エポケー, epoche')」として肯定も否定もせず、その意義を研究する学術的視点が求められると述べる。「ほとんどどの神話 (myth) もそうであるが、この場合も最初から仕上がった形で出現したのではなく、むしろ合成されてできあがってきた」、と言う。また、「往々にして歴史上のできごとは厳密に何が起こったか我々は知らない」と書いている。ピーター・L・バーガーが神の顕現の物語は決定的な場面で実際に何が起きたかを歴史学では確認するすべがない、と述べているのと同じである²⁾。

1820年「最初の示現」を受けて3年後の1823年秋、ジョセフ・スミスにとって転機が訪れた。モロナイという名の天使の訪れを受けて、スミスはアメリカ大陸の先住民の記録が記された金版³⁾の存在を告げられ、それが埋蔵されている場所を知らされた。その後スミスはこの金属の版をお金に変える誘惑に駆られ、これを克服するのに苦勞し、秘密を保つのに苦心するが、4年後の1827年9月22日金版と添えられていた翻訳のための石を入手して翌年翻訳を開始することになる⁴⁾。

第4章 モルモン書

1 モルモン書の翻訳

ジョセフ・スミスは1828年4月12日、ペンシルバニア州ハーモニーでマーテン・ハリスを書記としてモルモン書の翻訳を始めた。しかし、6月14日ハリスが書き記した訳文を身内に見せたいと懇願し、原稿116ページを持ち出してニューヨーク州パルマイラに出かけたため、翻訳は中断した。結局その原稿はもどることなく、9月下旬になって翻訳を中断した箇所から再開するがあまりはかどらなかった。翌年4月オリバー・カウドリが来て書記をすと申し出て以降、4月7日から翻訳が再び進み始めた。そして集中的な作業をへて6月に終了する。

失われた116ページは後述するように現モルモン書には含まれていないので、結局期間にして1829年4月初めから6月いっぱい約3ヵ月、途中翻訳を離れた時期が何度かあったので実質は60日強で翻訳を終了するという速さであった。一日平均8ページのペースであったと推測される¹⁾。

この翻訳の方法は、スミスが金版を見ながら、翻訳のための石の助けを借りながら、カーテンで遮断した向かい側の書記に口述筆記させたと伝えられている。しかし、当時近くにいて目撃した身内や支持者は、彼が帽子に顔を突っ込み、中に入れた石を見ながら口述筆記させていた、そしてその間金版は棚に置いたままであったと証言している²⁾。ヒュー・ニブレーはジョセフ・スミスの言う翻訳 (translate (L. *transfere*, to *transfer*)) は、「過去の世代や文化・言語から継承されたものを別の世代・文化・言語に伝える³⁾」こと、と広義の意味で受けとめるべきであ

ると言う。金版は靈感を受けるための触媒的な存在で、それは訳文が靈感によって与えられる時には不要でさえあった、と説明する。言いかえればモルモン書は「啓示」(神の力)によって与えられた聖典なのである。

さて、失われた116ページの話にもどると、これはすぐれて本文批評にかかわる事柄で注目に値する。研究者のほとんどがスミスは最初にもどらず、中断した箇所から翻訳を再開したと考えている。具体的には、物語の冒頭であるニーファイ第一書からやり直したのではなく、モーサヤ書から終りまで翻訳した後、最初のニーファイ第一書にもどって中断した所まで訳してつなぎ完成したのであった。それは使用している用語の頻度を分析して確認できるし、内容面からも文芸批評の対象となって興味深い⁴⁾。

2 モルモン書のあらすじ

モルモン書と聞くと書名の響きから何か異質な内容が予想されるかもしれないが、旧約聖書と新約聖書と不可分の関わりがある。この書によると、物語は紀元前600年、ユダ王国のエルサレムに始まる。北のイスラエル王国はすでに百年以上前にアッシリアに滅ぼされ、ユダもエルサレムが十数年後ネブカドネザルに滅ぼされ、住民がバビロン捕囚に遭う目前のことであった。当時預言者エレミヤが人々を警告していた。同様に人々に警告を発していたリーハイが家族を伴ってエルサレムを脱出し、約束の地を目指して紅海沿いにアラビア半島を旅したのであった。

一行はアラビア半島の南岸に達し、そこから船で約束の地に向かいアメリカ大陸に漂着する。記述の中に狭い地峡が出てくることから、中米のどこかではないかと推測する研究者が多い。そこに上陸した彼らは、間もなくリーハイの息子ニーファイに従う義しい群れと反抗的な兄レーマンに従う粗野な群れに分裂して新天地に定着し、相互に反目し戦いを交えながら増え広がっていく。ニーファイ人は常に旧約の伝統に従う指導者に導かれて、自分たちの歴史を彼らの視点から記録して引き継いで

いく。民は神の教えに従う時に栄え、離反する時に神の罰を受けるといふサイクルを繰り返す。ニーファイ人がレーマン人の社会に伝道に向かったり、教えから離れていた人物がパウロのように改心して活躍したりするなど物語は多彩である。そして復活したイエスが彼らを訪れ、この地にいるイスラエルの末裔にも山上の垂訓などキリストの教えが説かれて記録される。そのような恵みを享受したニーファイ人も何世代か後に教えを離れて墮落し、レーマン人との戦いに敗れて全滅した。モルモン書の物語はこのようにして終わる。そして生き延びたレーマン人の子孫がこんにちのアメリカインディアンやインディオであると信じられている。ニーファイ人の記録が代々引き継がれていったものを、最後にモルモンという指導者が要約したので、モルモン書という名がついているわけである。なお、時代がずっと遡ってバベルの塔の頃、同じくこの地に導かれた移民の話も記されている。

3 モルモン書の評価・分析

モルモン書をどのように受けとめるかについて、以下五つの見方を取り上げる。信徒の間でも受けとめ方に相違があり、研究者の間でも異なった見解がある。最近30年の間に提示された注目すべきものを紹介し、読者の参考に供したい。そして最後に聖典とは何か、聖典と呼ばれるものが果たす役割は何かについてまとめてみる。

(1) 教会の立場・伝統的な考え

モルモン書について教会が取っている立場も、一般の平均的な末日聖徒の受けとめ方も、この聖典に記載されている内容を字義通り、史実として実際にあったこととして受けとめる姿勢である。聖書に対する受けとめ方も同様で、この点で末日聖徒は聖書直解主義的（fundamental）な姿勢である。そして特にモルモン書を教会のかなめ石、日本語的に言えば扇の要として重要視している。1990年代初め以来、「イエス・キリストについてのもう一つの証」という副題をつけている。なお、教会はモ

ルモン書を宗教書と見なして、たとえば地理学的な考察や証拠を求めることを推奨していない。

教会員は、モルモン書を書いた預言者たちは当時の人々を導いただけでなく、現代の状況を予見してこんにち必要とされる教えを記録している、と信じている。そしてモルモン書の存在は、ジョセフ・スミスを通して神が真の生ける教会を回復されたことの証拠であると受けとめている。

(2) 現代的要素を認める考え

その一つは、ヒュー・ニブレーのいう、記録を受け継ぐ者は要約したり編集 (redact, edit) したりする立場にいるという観点である。たとえば、イザヤが預言を書き記したものを後に発見した弟子が注釈を施し次代に伝える、など。継承者は単にそのままの形で次の人に渡すのではなく、同時代の読者と後代の人々に理解しやすくなるように、必要と思われること、たとえば要約、脚注を添える、説明、翻訳などを行なった、と言う⁵⁾。ニブレーはモルモン書を英語に翻訳したジョセフ・スミスも継承者の役割を果たしながら世にもたらしたのだと言っているわけである。

デューク大学の偽典の権威ジェームス・チャールズワース博士は、モルモン書の「明瞭なキリスト教的文面 (モーサヤ3:8-10) は、紀元前91年に書かれたとするより、クリスチャンがキリストの生涯を復唱している言葉と考えた方が自然ではないか。モルモン書が少なくとも二度編集の手を経ていることはモルモン教徒も認めるところである。預言者モルモンが4世紀に要約し、19世紀にジョセフ・スミスが与えられた伝承を編集 (redact) する機会を得ているからである」と述べている⁶⁾。

もうひとつは、オストラが提案した「古代文書の現代拡張発展説」とでも訳すべき考えである。1987年モルモン教研究の学術季刊誌ダイアログ誌に発表された58ページに及ぶ彼の記事は、モルモン書の起源やなり立ちについて真摯な研究成果を発表したのものとして注目された。オス

トラーによればジョセフ・スミスは古代の預言者が残した書に基づいて、19世紀当時問題となっていた事柄に答えようとした。古代に起源を持つモルモン書の本文と欽定訳聖書から洞察を得て、自由にしかも権威ある注釈・解釈を行なったのだと言う。これはモルモン書が古代に起源を持つと信じる立場と近代の要素を見出している知識層の見方を折衷したものとと言える。

オストラーは古代に起源を求めることができるものとして、モルモン書のヤコブ書に記載されているオリーブの木の譬え話をあげる。これは、聖書に出てこないゼノスという預言者が語ったものとされている。オストラーは、この預言者は「偽フィロン」という偽典に出てくるゼネスであった可能性がある、と見ている。この人物は師士の時代に生き、主に植えられたが腐った実をならせた「葡萄園」について語ったという。もうひとつ古代に起源を持つ可能性のある内容として、旧約の族長ヤコブが自分の裂けた衣の一部が保存されると語った話が、モルモン書のモロナイ書1章に引用されている点を指摘している。ほかにモルモン書の英語にヘブライ語の直訳的表現や修辞、特に対句法のキアスムス（交差対句法）が見出されることが、よく古代に起源がある証拠として教会内で語られるが、オストラーは「教義と聖約」や他の現代文にも見られると慎重である。

逆にモルモン書に現代的な要素があることについて、オストラーは次のように言う。モルモン書の文章はジョセフ・スミスの語彙と英語表現力を限界としており、19世紀初のアメ리카に普及していた考え・思想を反映し、時にそれは歴史学上の時代錯誤を含んでいた。用語上の例をあげれば、「ユダヤ人」、「異邦人」という言葉は紀元前4世紀捕囚から帰還後使われ始めた言葉であって、それより古いはずのモルモン書に出てくるのは時代錯誤の明らかな例である。ほかにも「会堂」「教会」、「クリスチャン」なども翻訳者の時代錯誤によるものであることを指摘している。また、ジョセフ・スミスの在世当時、アメリカインディアンがイスラエルの子孫であるという考えが人々の間にあった。当時エサン・ス

ミスが「ヘブライ人の眺望」(Views of the Hebrews) という本を出していた。モルモン書とは相違もあるので、この本がモルモン書の出所であるとは現在考えられていないが、アメリカインディアンがイスラエルの子孫であるとか、野蛮で無知なグループと文明的なグループがいたことなど類似点もあるので、影響を受けていたことが考えられる、とオストラーは認めている。そしてモルモン書に表れた政治形態も、王を拒む傾向や自由平等を謳う点でアメリカの共和制を反映したものと見る⁷⁾。

オストラーの「古代文書の現代拡張発展説」は興味ある解決案に見え、一定の説得力を感じるが、(1)のグループからは斥けられ、(3)以下の考えの人からは最近ほとんど顧みられなくなっている。

(3) 偽典・フィクション説

教会外の学者は皆、モルモン書をジョセフ・スミスの作と見ている。ところが、1980年前後から教会内の研究者の中にもモルモン書がスミスの手になる偽典 (pseudepigrapha) であることを示唆する人が現れ始めた。それはブリガムヤング大学の哲学教授トルーマン・G・マドセンで、聖書考古学者ウィリアム・F・オールブライトがモルモニズムは広義の偽典を所有していると述べたことや、アメリカの著名なカトリック神学者レイモンド・E・ブラウンがニブレーの著書を読んで、モルモン書は真正な偽典 (authentic pseudepigrapha) と呼べると語ったことを紹介している⁸⁾。ここで言う偽典とは、著者が過去の人物の名前を借りてその人物が書くと思われるような内容を書いた文書を言う。特に紀元前200年から紀元200年の間に書かれた旧約、新約聖書に関連する宗教的な文書について言う。そしてマドセンは1978年、モルモン書を偽典視する聖書学者クリスター・ステンダール、ジェームス・H・チャールスワースの二名を含め、学外の学者を多数LDS教会の知的総本山とも言えるユタ州プロボのブリガムヤング大学に招いて、宗教間対話のシンポジウムを開催している。そのシンポジウムで発表された講演の論集「モルモニズムの考察：ユダヤ・キリスト教との類似点」(Reflections on

Mormonism: Judaeo-Christian Parallels) が同年刊行され、教徒たちもモルモン書が偽典の特徴を備えていることに気付き始めたのであった。

次いで、私がブリガムヤング大学に留学していた頃在籍していたアンソニー・A・ハッチンソンが、1993年モルモン書は19世紀にもたらされた虚構の (fictional) 宗教書である、と言う記事を書いた。アメリカカトリック大学の聖書学博士課程にあったハッチンソンは、それまでモルモン書が古代に起源を持つことを擁護していた主な論者に反論し、虚構論を展開した。まず大勢の学生に影響を与えたヒュー・ニブレーについて、彼が多用するモルモン書と古代文書との間の語彙比較や類似した文面・文体の対比は都合のよい寄せ集めの難があり、対比の方法には欠陥があることを知らなければならない、と退けている。そして一時教会内の研究者に好意的に受けとめられていたジョン・ソレンソンの「モルモン書の古代アメリカにおける地理的仮説」は、方位の点で無理があると言う。つまり、モルモン書で民が南から北へ移動したという記載があるところ、中央アメリカがモルモン書の民の生活した場所であるとする、全体に西北から南東に向かう地形となっているので、むしろ東から西へ移動したと言わなければならないと指摘している⁹⁾。

ハッチンソンは、モルモン書を19世紀にもたらされた虚構の宗教文書（聖典）と理解すると、大きな利点があると言う。すなわち、読者はモルモン書の中の「物語」に注目して読み、改めて解釈を試みることができる。いわば正典（カノン）の中に読者が各自読むべき箇所（正典）を見出し、能動的な読み方ができるようになると言う。モルモン書を読むには、聖書関連の一般的知識を深め、洗練された歴史的視点を携え、知的・霊的にさらに明晰な目で読む必要がある、と結論する¹⁰⁾。

さて、21世紀に入って教会外の聖書学者で積極的にモルモン書を偽典視する人物が現れた。それは福音主義派に育ちながら新約学博士号を取得し、批判的聖書学を教える神学者となったロバート・M・プライス教授である。彼はモルモン書を次のように見る。旧約聖書でヒルキヤが神殿で律法の書を見つけたというのは（列王下22章）、実は発見したので

はなくヒルキヤなど申命記学派が創り出したものであった。ジョセフ・スミスが行ったことも同様に、ダニエル書、申命記、牧会書簡など古代の偽典作者の系列に入ると言う。

新しい聖典の創出に当たり、スミスは聖書を資料としてそれに新しい解釈を施し、宗教的な物語を生み出したと考えることができる。これは正に古代のラビや福音書の著者が行ったことと変わりがない。このように考えれば、主流派の聖書学者もモルモン書の研究者も歩み寄ることができる。聖書学者はモルモン書が聖書とよく似た種類のものであって、同様に尊重すべき種類の書物であると認識しなければならないし、モルモン教徒はモルモン書がジョセフ・スミスの手になる現代の偽典である可能性を受け入れなければならない、プライスはこのように結んでいる¹¹⁾。

(4) 文芸批評および記号論による分析

さて、モルモン書の史実性論議¹²⁾を不毛に感じる末日聖徒は、モルモン書の内容に焦点を移し、文学としてのモルモン書という観点から論文や書籍を発表した。いずれもモルモン書に詩、比喩、予型など文学的な要素が含まれていて、改めて鑑賞する価値のある聖典であると訴えている¹³⁾。しかし、ここではより学究的に鋭く分析したマーク・D・トマスの物語（あるいは叙述）分析を取り上げ、続いて記号論による分析を取り上げることにする。

トマスの著「クモラの丘を深掘りする—モルモン書の物語 [narratives] 分析」は、モルモン書を高等批評の中でも文芸批評の立場から、特に物語分析 [narrative analyses] を用いて解説している。著者はモルモン書に欽定訳聖書の言語とモデルが随所に見られること、そして19世紀アメリカの思潮や言語・表現が反映していることを多くの例を挙げて示している。モルモン書は19世紀の読者を対象に書かれている。著者は聖書の高等批評の手法を用いて読むと、モルモン書を再評価でき、さまざまな問題に気付いて興味が尽きることがない、と言う。

まず言語の面から見ると、モルモン書のどのページにも聖書（欽定訳）の痕跡（echo）が見られ、聖書の影響を強く受けていることがわかる。それと19世紀アメリカの英語の両方が組み合わされている。モルモン書の目的は、1）聖書を支持し（第二ニューファイ 29:1-14）、2）本文および内容を修正し（第一ニューファイ 13:19-42）、3）ともに働く（第二ニューファイ 3:11-12）ことである。これはヨセフの子孫に契約を思い起こさせ、彼らの間に争いをなくし平和をもたらすことを指す。この三つの目的をはたす過程で聖書を引用し、解釈を加え、時に改訂・修正を施す。これは性質から言えば聖書の注解であり、ユダヤ教のミドラシュ的拡張がなされているとトマスは見る。

以上の目的がアメリカに移住したイスラエルの末裔の物語の中に組み込まれているのである。著者トマスは、このモルモン書を文芸批評の物語論（narratology）を適用して学術的に分析した最初の人物である。全般的には新約学者クロッサンがあげる「物語」（narrative）の型の内、モルモン書は「擁護論的」（apologue）であると言う。階層に分化しかけていた19世紀のアメリカに対して警告の声であったという意味で、あるいは当時アメリカで見られた懐疑的な風潮に対してイエス・キリストを擁護し、啓蒙主義に対して擁護論となっていたと言うのである。

モルモン書に出てくる具体的な物語 narrative の型としては、「警告する預言者」、リーハイなどの「移民物語」、行き先不明で導きを求める「荒野物語」などが繰り返し現われ、19世紀初頭の「示現・幻（まぼろし）言説」の傾向もモルモン書に反映していると解説する。ジョセフ・スミスに先行して幾人かアメリカ東部に示現を受けたと言う人がいたのである。「改宗物語」も19世紀アメリカに見られた型がモルモン書に現れているという。それは自分が「生まれながらの人」であることを知り、「罪を認め」、「イエスに改宗」するという三つの過程を指し、19世紀の福音主義派（メソジストなど）に見られたもので、モルモン書ヒラマン12:3-5,7にその片鱗を見ることができる。ほかに、19世紀初めアメリカに広く見られた反カトリックの思潮が、第一ニューファイ13:34の

「あの忌まわしい教会」という表現に現れていると指摘する。

著者は、もし末日聖徒が自分の信仰に価値があると思い、モルモン書を尊重するなら、正直で真剣な研究に代わるものはない、そして19世紀の表現や聖書からの影響を認識して読むとき本文 (text) の声を聞き、本文とより深い対話に入ることができるだろう、と言う。著者は17-19世紀のアメリカ文学、キリスト教界の説教や表現を詳細に調べ、綿密な考証の上で書いているので、この本はモルモン書を理解する上で重要な一冊である¹⁴⁾。

さて、2008年アメリカのペンギン出版社がペンギンクラシック叢書のひとつとしてモルモン書を刊行した。序文で北カロライナ大学の宗教学教授マフリー・キップは、モルモン書と聖書の密接なインターテクスチュアリティ（「テキスト間相互関連性」あるいは「間テキスト性」）に注目して読むように提案している¹⁵⁾。インターテクスチュアリティとは、フランスのジュリア・クリステヴァの記号論から生じた考え方で、過去の作品のテキストが解体され再構成されて、新しい物語が創作されていくときに生じるテキスト間の相互関連性を言い、この面での研究が現代文学理論で注目されている。現代文学の一つの例をあげれば、スタインベックの「エデンの東」をあげることができる。著者は創世記の物語を現代カリフォルニア州に背景を移して、再び語っていることが明白である。旧約聖書の中にも、エレミヤの表現にイザヤの言葉が何度も引き継がれている例を始めとして多数見られる。新約聖書にも同じくイザヤの預言が数多く引かれ、時に極めて恣意的に複数の箇所が融合した形で、著者の目的に沿って織り成されている。これらの引用や借用は盗用とか剽窃と見なされることはなく、むしろ著者の素養であり自然な表現であった。

南イリノイ大学で記号学の分野で学位を取得した高山真知子が、すでに1992年、インターテクスチュアリティの面からモルモン書を分析していた。高山はモルモン書の登場の仕方において、また内容面、さらに書物の生まれた社会背景の点でも、聖書とインターテクスチュアリティの

関係にあると言う。例えば、昔の記録が発見されて聖典となったと言うのは、申命記がエルサレムの神殿から発見されたという話に似ており（これは前述のプライスもあげている）、内容では次のような点をあげている。「民族の墮落を嘆き祈る預言はイザヤ書に極めて近く」、「復活したイエスがニーファイ人の約束の地にやって来て与える福音は、新約聖書マタイ伝の山上の垂訓を再び説く」ものであり、そして「戦いや治者交代の記録は旧約聖書の中の歴史記述文学のパターンに似ている」と指摘する。そして内容にとどまらず、書物を生み出した社会環境も古代ユダヤ教が捕囚・離散の憂き目に遭った後に成立したことで、モルモン教徒の供給源がアメリカの貧しい白人を主とし、英国の大都市の下層から移民して来た人々で構成されていたことが類似していると説明する¹⁶⁾。

そして近年文学理論の中で盛んに論じられる物語理論（narratology）を適用して、2009年広島大学の吉中孝志教授がモルモン書を文学的に見る試みを行なっている。モルモン書には数多くの語り手が登場するが、研究者たちは多くの場合、実際の語りはジョセフ・スミスの声であるとみている。ちょうど「老人と海」の主人公の語り手が、実際には著者自身が語っていると見るのと同様の見方である。しかし、時に語り手は「信頼できない語り手」（unreliable narrator）となることがある。「信頼できない語り手」とは、経験不足や知識不足から判断が損なわれる語り手のことである。モルモン書の例として吉中は次のような場合をあげている。ニーファイはアメリカ原住民が黒い肌を持つようになった理由として、彼らが不義に陥ったためであり、後にキリストの福音に改宗すれば「白い、喜ばしい民」になる、と語る（ニーファイ第二5:21）。しかし、後の1981年版のモルモン書では「清い、喜ばしい民」と改訂されている。これは、白人至上主義が普通であった時代から、こんにちの人種差別を退け平等をうたう時代に移り、訂正されたものであるが、当初語り手が予測し得なかった限界によるものである。

モルモン書の読者が戸惑うもう一つの問題を、吉中は次のように解説している。それはニーファイが約束の地に旅立つに先だって、モーセの

律法を含む記録を入手するため、譲り渡すことを拒否した有力者ラバンを殺したくだりのことである。語りの中では生命の危険を感じるほどに相手からひどい仕打ちを受けたし、「みたま」（神から与えられる靈感）が命じたからと理由が示される。ニーファイは「一人の人が滅びるのは、一つの国民が不信仰に陥って滅びてしまうよりはよい」（第一ニーファイ4:13）というみたまの声を耳にする。同様の表現が新約聖書（ヨハネ11:50）に、また文学作品（マーロウ「マルタ島のユダヤ人」）に表れているにしても、現代の読者にとっては横暴すぎる印象を免れない。さらに粘り強い交渉の余地はなかったのか、という思いが生じる。吉中は結局ニーファイが旧約の「目には目を」という律法に支配されていた、知恵に不足した「語り手」だったからではないか、と言う¹⁷⁾。

物語理論による分析はモルモン書の時代的限界を指摘することになるが、それは人類の科学的知識が絶えず前進し、平等・人権など倫理道徳面の意識が高められてきたからである。今日の読者が過去の「信頼できない語り手」あるいはnaïve（素朴な）narratorを超越しているのである。しかし、それは旧約はもちろん新約聖書の場合にも同じことが言える。制約や限界を認識しながらも、今日に通じる普遍的なメッセージをくみ取ることは依然可能である。

（5）精神分析的アプローチ

モルモン書にジョセフ・スミスの自伝的要素が含まれているのではないか、という見方がプロディや高山によってなされてきた¹⁸⁾。しかし、ここではモルモン書がジョセフ・スミスの作になるという前提の上で、さらに一歩進めて精神分析の視点から取り組んだ三人の見方を紹介する。それはユタ大学医学部精神医学准教授であったC・ジェス・グローズベック、精神科医ロバート・D・アンダーソン、そしてモルモン史研究者ダン・ボーゲルの三人である。

グローズベックは1988年サンストーン誌で、モルモン書に出てくるリーハイの夢は、1811年にジョセフ・スミスの父ジョセフ・スミス・

シーニアが見た夢と酷似しており、モルモン書を翻訳するに当たって父から聞いた話を思い出したのではないか、換言するとジョセフ・スミスの潜在意識にあった人生の重要な出来事が表出したのであろうと書いている¹⁹⁾。次にアンダーソンは30年にわたる初期の教会史および精神分析の研究をもとに、ジョセフ・スミスは無意識のうちにあるいは意識して自分の個性、葛藤、あるいはたどり着いた答えをモルモン書に注入している、と見た。モルモン書はスミスの自伝と理解できると言う。もっともスミスが故人であって確かめるすべがないため、アンダーソンは自分が提示することはあくまで試みであり推測であると断っている。それでも、スミスが幼少期から思春期にかけて、16年間に10回引越して安定しなかったこと、ひどい貧困、弱く頼りない父のアルコール依存、そして特に極度の痛みを伴った三度にわたる足の手術などが、モルモン書に反映していると言う。幼時の寄り添えない無力さを逆転させ、人の上に立とうとする気持ちがあり、モルモン書に登場するニーファイ、アルマ、モルモンなど英雄的存在はジョセフ・スミスのアルター・エゴ（alter ego 第二の自我）であると観察する。そして、カリスマ的指導者に見られるナルシストの特性が現れていると言う²⁰⁾。

最後にダン・ボーゲルであるが、彼もジョセフ・スミスの幼少時の境遇や心理がモルモン書に反映している点で、アンダーソンなどと共通している。ただ彼の著の特徴は、とにかく当時の大変膨大かつ詳細な資料を駆使して照合、検証を試みている点であって、これを読むとジョセフ・スミスの金鉱探しから金版入手に到る流れが連続して見えてくる。そして翻訳している間、並行して受けた啓示（後に「教義と聖約」に含まれる。7章など）に影響され、逆にモルモン書の内容に接して神に問い、答えを得るなど相互作用が見られることを示している。つまりスミスは思索しつつ翻訳を進めていた面があった。ボーゲルはモルモン書がスミスの作になると言う立場に立つため、記述に読み込みすぎが入ったり、隙間を埋めようとして逆に想像がふくらんだりしている。たとえば、書中の、以前に信仰を持つに至っていたというレーマン人の

娘エービシは、ジョセフの母ルーシーの事であろうと言う。ルーシーも早い時期にキリスト教に帰依していたからである。そして、この場面でレーマン人の王と妃が改宗するが、これはジョセフの父母を指している可能性があるとする（アルマ19章）。また、隙間を埋めるということでは、実体がわかっていない金版について、ジョセフ・スミスがブリキを用いて作ったのではないかと説明する。それに対し他の研究者は、想像による補てんは逆にそれに対する説明責任が求められることになると見る。いずれにせよ、そのような部分が多いため、ボーゲルの内容は時に説得力に欠け、必然性に欠けるように見えることがある。それで保守的な層から厳しく批判されているが、二つの歴史学会から賞を受けるなど高い評価も得ている²¹⁾。

4 モルモン書をどう見るか、結語

以上モルモン書をどう見るか五つの見方ないしは手法を考察してきた。一般には聖書に加えられた聞き慣れない書物であるため、何か得体の知れない代物と受けとめられるかもしれない。しかし、一言で言えば、アメリカに移民して来たイスラエルの民の物語を用いて、聖書およびキリスト教に加えたコメンタリー的性格を持つ本である。私沼野は(3)「偽典説、フィクション（虚構）説」以降(4)「文芸批評および記号論による分析」(5)「精神分析的アプローチ」を参考にしてモルモン書を読む時に、得るところが大きいと考えている。

結局、宗教の聖典は史実性如何に拘泥するのではなく、聖書批評学者ロバート・M・プライスが書いているように、「物語の叙述の世界」に入って登場人物の語り（ナレーション）に励まされ、教化を受けるべきものであり、聖書で言えばそこに記されているイスラエルの民救済の歴史の個々の場面をいわばドラマと見て、読者は現実の生活でその登場人物（たとえば主役）を演じようとするのである。そのとき人は幸福な結末に至るシナリオを選んでそれが実現できるように努力する。言い換えれば、信仰者は自分が物語の中の人物を演じていると思うときに、目標

を目指して生きる力を得るのではないか。何かを達成しようと努力するのをあきらめれば、人生は意味を失う。信者は「叙述の世界」（物語の場面）を、この困難で曖昧な現実の生活に重ねることによって、生きていく意味がもたらされる面がある、とプライスは説明する。さらに、聖典の中には預言者や使徒の名を借りた書（ダニエル書、新約の書簡の一部など）もあるが、知的な読者は「進んで不信（詮索）を一時停止」させ「詩的な信仰」（コールリッジの表現）にひたって、健全で啓発的な影響を享受するのである、と現代人の聖典の読み方を述べている²²⁾。モルモン書もそのようにできるし、現代の末日聖徒も多くそのように読んでいるのではないかと考えられる。

〈著者紹介〉

沼野治郎（ぬまのじろう）

1941年上海に生まれる。1964年大阪外国語大学中国語科卒業。1974年から1976年までブリガムヤング大学（アメリカユタ州プロボ）に留学、言語学修士取得。1980-1998年徳山大学、1999-2008年広島国際学院大学英語担当教授、その間、メリーランド大学岩国センター（日本語）、山口大学、広島大学（共に英語）で講師（非）を歴任。2009-2011年中国黒竜江外国語学院（元ハルビン師範大学恒星学院）で日本語を教えた。2002-2006年大学英語教育学会（JACET）の理事兼中国・四国支部長。1988-2000年同人誌「モルモンフォーラム」（季刊年2回）を主宰。現在ブログ NJWindow(J) http://blog.goo.ne.jp/numano_2004 を管理運営。

【著書】『私が接した言葉とその文脈：音声学から語義、思想まで』1999年

【論文】

“How International Is the Church in Japan?” Dialogue: A Journal of Mormon Thought, Vol. 13, No.1 (Spring 1980)

「日本におけるモルモン教会」立命館言語文化研究 6巻4号, 1995年

“Mormonism in Modern Japan.” Dialogue: A Journal of Mormon Thought, Vol. 29, No.1 (Spring 1996)

“A Mormon Japanese Reader’s Digest.” Sunstone, Vol. 19, No. 1 (Spring 1996)

「都市化と新宗教の興隆：創価学会と日本のモルモン教会の場合」広島国際学院社会学部「現代社会学」2号（2001年）

“Perseverance amid Paradox: The Struggle of the LDS Church in Japan Today.” Dialogue: A Journal of Mormon Thought, Vol. 39, No. 4 (Winter 2006)

“Hasty Baptisms in Japan: The Early 1980s in the LDS Church.” Journal of Mormon History, Vol. 36, No. 4 (Fall 2010) 他

● 装幀 上野かおる

モルモン教をどう見るか

第三の視点をさぐる

2013年1月15日 第1刷発行

著者 沼野 治郎

発行者 山崎 亮一

発行所 セセラギ出版

〒530-0043 大阪市北区天満 2-1-19 高島ビル 2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 株式会社関西共同印刷所

©2013 ISBN978-4-88416-215-3

せセラギ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は出版社へご連絡ください。そのために出版社からテキストデータ提供協力もできます。

ISBN978-4-88416-215-3

C0014 ¥1700E

定価(本体1,700円+税)



9784884162153



1920014017001



もっと読む

●電子本（PDF版、税込1250円）を購入する

●紙の本（税込1785円）を購入する